

## 実践報告

# ボランティア日本語教師養成講座『実践：日本語教育』実施報告 — 留学生センターにボランティア日本語教師が期待すること —

福 岡 昌 子

“Practical Japanese Language Teaching” :  
Volunteer Japanese Teacher Training Symposium Report and Questionnaire Results.

FUKUOKA Masako

### 〈Abstract〉

“Practical Japanese Language Teaching”, a symposium, was held on August 28, 2004. The purposes for this symposium were to provide training for volunteer Japanese language teachers, as well as, to improve cross-cultural understanding and international exchange in this area.

In addition to the report on the training lecture, this manuscript includes the results of the survey I performed about what local volunteer Japanese language teachers expect from the C.I.S. at Mie University.

キーワード：ボランティア日本語教師養成、地域貢献、国際交流、異文化理解、アンケート

## 1. はじめに

三重県は日本でも在日外国人が急増している地域であり、外国人登録者数の人口比率も高い。就労者や家族滞在、国際結婚配偶者を対象にした在日外国人のための日本語ボランティア教室は三重県内で30教室を超え、日本語指導を中心に様々な活動が行われている。

平成16年度三重大学国際交流基金の助成<sup>(1)</sup>を受け企画し、2004年8月28日に地域の国際交流と異文化理解および地域の日本語指導への貢献を共に考える場として、ボランティア日本語教師養成講座『実践：日本語教育』を開催した。本稿では、その活動報告およびアンケートの実施結果について報告し、ボランティア日本語教師が三重大学留学生センターに期待することについてまとめる。

## 2. この講座の概要

留学生センターでは、「地域在住外国人のための生活日本語講座」として、これまで

2000年より週3日間(夜間)の約3ヶ月日本語入門講座コースを開講し、昨年は6月から7月の土曜日に全8回(1回2時間授業)の短期集中型コース生活日本語講座が組まれた。

今回企画した『実践：日本語教育』の主たる目的は次の4点である。①留学生センターが地域のボランティア日本語教師と交流を深めることにより、経験や知識を交換し、共に研鑽し合うことで、地域の日本語指導、地域の国際交流や異文化理解の一助となること。②開催時期を夏季休暇中に開講することにより、外国籍児童に関わる人が多い小中学校の教師と日本語ボランティア教師との相互交流が行われる場になるよう図ること、③大学の日本語教育専門家として地域に何ができるか、何が必要とされているか、この講座を通して理解を深め、知ること、④日本語指導のための実践的な研修の場としての役割を大学が担えるよう図ること、である。

対象者は、ボランティア日本語教師ばかりでなく、日本語教育に今後携わろうと思っている方、日本語教育関係者を対象とした。従って、三重県の小中学校、県内23のボランティア日本語教室、県内の大学、市役所等公的機関にポスター・チラシを配り、さらに、2004年6月5日三重大学で行われた日本語教育学会第1回研究集会の際にも、チラシを配布するなど講座の案内を行った。その結果、122名の参加申し込みがあり、当日は台風が迫る中102名の参加があった。三重県内ばかりでなく、愛知県、神奈川県、滋賀県、奈良県など多くの地域からの参加があり<sup>(2)</sup>、ボランティア日本語教室の日本語教師をはじめ、大学、小・中学校、高校の教師、公的機関の方からの参加があった。

企画内容は、今回は教授法や指導方法などの教師側からの視点ではなく、学習者の心理や学習者からの視点に中心を置き、日本語の授業に関わる内容のものを検討した。また、講演内容も地域で日本語教育に携わる日本語教師の役割について考えることができる講演を企画できないか検討し、お茶の水女子大学大学院岡崎眸教授のご協力を仰いだ。このようにして、組まれた企画が次のものである。

①「直接法の逆体験：留学生の日本語学習におけるストレスを知る!」、②「4人の上級レベルの日本語学習者が本音で語る：こんな授業がよかった!こんな授業をしてほしい!こんな授業はやめてほしい!」、③お茶の水女子大学大学院岡崎眸教授による講演「多言語・多文化社会を切り開く日本語教育—日本語教師にできること—」である。

### 3. 講座の内容

#### 3-1. 「直接法の逆体験：留学生の日本語学習におけるストレスを知る!」

##### 3-1-1. 直接法という日本語教授法について

日本語を指導する教師が、学習者の立場に立って、直接法で他言語を学び、留学生など

日本語学習者のストレスを体験してみるというものである。直接法とは日本語教育で多く使われている教授法であり、媒介語や母語の使用をできるだけ抑えて目標言語で教える教授法である。その逆体験に先立ち、日本語教育における直接法とは何かについて、定義や日本語教授法の歴史、指導原理、長所と短所、そして、現在日本語教育の現場で使われている教授法、そして、今後の課題として「ボランティアによる日本語教育に合致した日本語教授法」の開発の必要性について説明を行った。

### “直接法”の逆体験： 日本語学習者のストレスを知る！

三重大学留学生センター  
福岡島子

### 直接法とは？① 定義

「言語表象と意味とを母国語をはさまずに、  
直接結び付ける習慣を養う言語教授法」  
(『英語教授法事典』1972)

### 直接法とは？② 日本語教授法の歴史

19世紀末「文法訳読法」への批判として直接法が生まれる  
①ダラン・メソッド(Gouin Method)  
②フォネティック・メソッド(H. Sweet)  
③オーラル・メソッド(H. Palmer)  
→1920年代 長沼直兒(京都大学日本語  
主任教官)によって日本語教育に紹介  
↓  
伝統的な日本語教授法→1960年代 オープンイテングル・メソッド  
(ワシントン大学、行徳圭三中心) →  
パターン・プラクティス  
↓  
折衷主義的な教授法 →1980年代 コミュニカティブ・アプローチ  
コミュニケーション能力の育成

### 直接法とは？③ 指導原理

伝統的な日本語教授法

- ・ 媒介語を使用したり、文法説明をしつたりしない。
- ・ 実物や絵や写真、動作などを活用する。
- ・ 教室の中に作りだされた状況、即ち場面の中で、文型や文法事項を提示して、その意味や用法を理解させる。
- ・ 場面の中で文型や文法事項を繰り返し練習させる。(文型・文法事項を中心とした文法能力の習得と応用)

### 直接法とは？④ 長所と短所

**長所**

- ・ 翻訳をしないので、目標言語で考える習慣ができ、目標言語に早く慣れる。
- ・ 学習者の母語が異なっても一緒に教えられる。

**短所**

- ・ 目標言語で場面や例文などから意味や文法のルールを理解できるように指導していくため、教師にある程度の指導技術が必要である。
- ・ 場面や例文などから文法のルールを理解する過程がうまくいかないと、学習者が不安になったり、語解したりする。

＊実際の授業：母語などの媒介語による文法解説書や単語帳を自習用教材として利用する。

### 折衷主義的な教授法

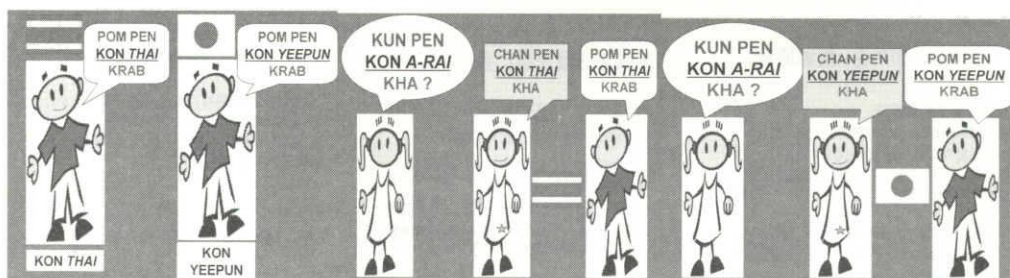
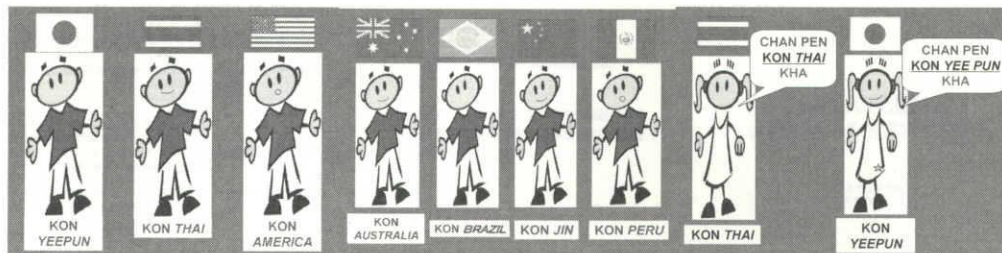
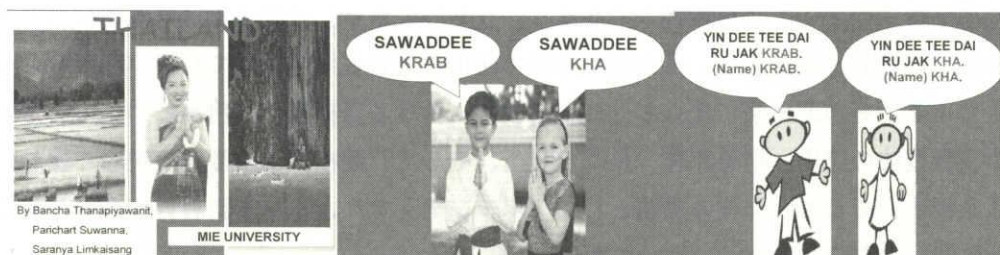
- ・ 伝統的な日本語教授法を基礎に置きながら、その上にコミュニカティブ・アプローチの学習活動を加味した折衷主義的な教授法が有効であろう。(菊池1993)、(西口1995)

「ボランティアによる日本語教育」に合致した  
日本語教授法とは？・日本語教育の課題の一つ

### 3-1-2. 「直接法の逆体験」

次に、三重大学の生物資源学部、教育学部、工学部修士課程で学ぶタイ出身の留学生3名 (Saranya Limkaisang, Bancha Thanapiyawanit, Parichart Suwanna) が教師となり、「タイ語を学ぶ初日の授業」として、挨拶を中心にタイ語でタイ語を学ぶ「直接法の逆体験」を行った。会場のホールを教室と見立て、当日の参加者に学生となってもらいタイ語のレッスンをを行った。次に示すのが直接法の逆体験の際に、テキストとして配布し、さらに、会場ではこのパワーポイントを使って、導入ならびに練習を行ったものである。

今回の練習内容は、「こんにちは。」「はじめまして。(名前)です。」「どこの国の人ですか。」「(国名)人です。」「さようなら」という一連の挨拶であった。タイ語には、話し手が男性の場合と女性の場合で異なる文末詞があるが、その違いを出席者にどう気づかせ、誤用を直すか、また、文型の提出、導入順をどうするか、練習方法をどう指導していくか、タイ語の教師となる3人と何度も検討した。



3-1-3. 「4 人の上級レベルの日本語学習者が本音で語る：こんな授業がよかった！こんな授業をしてほしい！こんな授業はやめてほしい！」—①「良い日本語授業の条件とは？」

ここでの企画は、日本で学んだ留学生たちにとって日本での授業はどうだったのか、実際にそれを言葉に表すことができる上級レベルの日本語学習者に本音で話してもらい、それを日本語教育関係者がどう聞くかというねらいであった。今回は、三重県で学んだ日本語学習者で、海外の日本語教育事情が語れる方、ボランティア日本語教室で学んだ方、日本語学校で学んだ方、そして、三重県にしっかりと根をおろして生活されている方の計4名にお話をさせていただくことにした。

その前に、「良い日本語の授業とはいったいどんな授業か」について、「良い日本語授業の条件」を縫部（1994、1998）がまとめているので、その内容をパワーポイントおよび配布資料で紹介を行った。縫部（1994）が挙げた良い日本語授業の条件 3AJC について、下記の 3A（Attentive, Attractive, Active）3J（Joinable, Joyful, Jokey）3C（Cooperative, Creative, Curious）を説明し、さらに、3AJC に当てはまらない授業とは何か、良い日本語授業の特徴 10 項目についてまとめた。最後に、縫部（1998）による「指導技術が大切といっても二義的なもので、第一義的なものは、教師と学習者の信頼関係の形成であり、人間への接近の仕方である。自分が外国語を学びたいとか、心を開きたいと思うような対人関係を結ぶことである」という指摘を紹介した。

### 良い日本語授業の条件とは？

・ 3AJC (縫部義憲(1994)『日本語授業学入門』)

Attentive	Attractive	Active
(学習者の注意が授業に向いている授業)	(学習者の興味・関心を引き付けている授業)	(活動的な学習活動を行っている授業)
・よく通る声 ・視覚教具・教材 ・指導法に変化をつける ・多くの学生に質問し、授業に参加させる ・教材に興味を持たせる	・十分な知識を持ち、教材をよく理解している ・学習者を公平に扱う ・教師がその専門が好きで、興味を持っている ・教師としての仕事が好きである	・学習者は日本語をコミュニケーションの手段として習得することを要求しているため、実際に使えるように導く

### 3AJC(縫部1994)

Joinable	Joyful	Jokey
(活動の主体が学習者に置かれている授業)	(他者と楽しい触れ合いができている授業)	(緊張を緩めた、明るくて面白い授業)
・一斉形態の活動 ・集団活動 ・小グループ活動 ・ペア活動 ・個人のニーズやレベルに応じた活動	・機械的なドリル練習は避ける。 ・楽しい生き生きとしたコミュニケーション活動を行う	・ユーモアや笑いのある授業 ・リラックスした楽しい雰囲気

### 3AJC(縫部1994)

Cooperative	Creative	Curious
(学生同士に協力が見られる授業)	(学習者の創造性を伸ばしている授業)	(知的好奇心を満たしている授業)
・コミュニケーション活動を通して、協力的な関係を形成する ・成長と学習を促進することができる	・学習者一人一人の価値観やアイデンティティを明確化する言語活動を行う ・創造性開発につながる	・異文化としての日本文化 ・日本文化と日本語との関連を把握させることが大切である

### 3AJCの当てはまらない授業

- ・ 長々と説明の時間を取って教師主導で進めている授業

### 良い言語授業の特徴

- ・ ①授業が生き生きとしている。
- ・ ②授業が楽しい。
- ・ ③授業に学習者が積極的に参加している。
- ・ ④授業がわかりやすい。
- ・ ⑤授業に変化(静と動、緩急)がある。
- ・ ⑥授業に教師が情熱を持って参加している。
- ・ ⑦授業に学習者が興味を持っている。
- ・ ⑧授業の雰囲気リラックスしている。
- ・ ⑨授業が外国語(日本語)で満ちている。
- ・ ⑩授業がよく準備されている

- ・ 外国語(日本語)の教え方に王道はありません。唯一最良の教授法というものも存在しないのです。指導技術が大切といっても二義的なものです。
- ・ では、何が第一義的な問題でしょうか。それは教師と学習者の信頼関係の形成であり、人間への接近の仕方です。
- ・ 自分が外国語を学びたいとか、心を開きたいと思うような対人関係を結ぶことなのです。

縫部義憲(1998)  
『心と心がふれ合う日本語授業の創造』

### 3-1-4. 「4人の上級レベルの日本語学習者が本音で語る：こんな授業がよかった！こんな授業をしてほしい！こんな授業はやめてほしい！」—②4人の学習者の発表

ここでは、4人の日本語の授業についての体験報告の要旨をそれぞれ簡単にまとめて紹介する。

#### (1) 海外の①海外の日本語教育での体験：オーストラリアの授業は僕の出発点！

〔現在オーストラリア国立大学2年生：留学生として来日〕アロン・クーツ

アロン・クーツさんは、文部科学省の奨学金を得て三重大学に日本語・日本文化研修生として1年間来日した。アロンさんの日本語教育との出会いは、小学校6年生のときである。小学校の校長先生の奥さんが自ら学んだ日本語を児童たち楽しく日本語を教えた。折り紙や日本の歌を習ったり、それまで見たことがなかった文字であるひらがなやカタカナをはじめ習ったりしたことが、その後の彼に大きな影響を与える。中学校、高校と通信教育ではあったが、ずっと「日本語」を取り続け、高校のときは交換留学生として来日し1年間長崎にホームステイをしている。日本へ旅行したときの新宿のホテルの窓から見た高層ビル群の東京の景色、ウォシュレット・トイレの体験、缶コーヒーのネーミングのユニークさなど、彼独自に感じた異文化体験を語ってくれた。

日本語の授業では、オーストラリアの高校で日本の漫画を扱った楽しい教材をテキストとして使いながらも、先生に翻訳させられ次々とあてられていっときの緊張感ある授業がとてもしやだったこと、また、通信教育で勉強するつまらなさを実感し、語学をやるからには交流を中心とした授業がいかに大切かを語ってくれた。そして、日本語を学ぶことの楽しさを、自らも楽しいという気持ちで教えてくれた小学校の校長先生の奥さんに感謝し、また、その楽しさが子供であった自分にも伝わったことによって、現在まで日本語が好きで勉強を続けることができたことを語った。最後に日本語を学ぶことはこんなに楽しいよという気持ちを、日本語学習者たちにもっともっと伝えてほしいと、ボランティア日本語教師の方々に語った。

#### (2) ボランティア教室での体験：三重で学んだ日本語という外国語

〔ブラジル出身で津市在住の元国際交流財団生活相談員〕デソウザ・セルジオ・アゲノル

デソウザ・セルジオ・アゲノルさんは、8年前に単身ブラジルから日本語が0<sup>ゼロ</sup>レベルの状態、日本へ働きに来た。日本での生活は難しく、仕事は3K（きつい、危険、汚い）の仕事しかないという話も友人から聞いていた。しかし、彼は日本という見知らぬ国に期待感を持ってやってきた。彼の運の強さに、いいボランティア日本語教室との出会いがあった。そのボランティア日本語教室で、ひらがな、カタカナから勉強を始めた。仕事は自動車工場での車のドアの点検だった。1時間50台のドアの点検だったのが、3年後に120台

になり、1つのドアを30秒で見なければならなかった。1100台のドアを検査して、もし1台の点検ミスがあれば、上司にひどく怒られた。また、仕事を始めた当初、彼のことを「おまえ、おまえ、そこのおまえ」、「ばか」など、上司や仕事仲間と言われた。

それらのことばの意味がよく理解できないで、ボランティア日本語教室へ行くと、ボランティア日本語教室の先生は「できればそのようなことばは使わないで、きれいな日本語と一緒に勉強していきましょう」と言っていていつも彼を励まし、明るく笑顔で挨拶してくれた。彼は、そのボランティア日本語教室に行くと、どんなに疲れていても日本語を勉強しようという気持ちになっていった。彼は、やがて、松阪教育委員会や国際交流財団の外国人生活相談員として働くようになった。そこでは、日本人児童同士のけんかなのに、ブラジル人外国籍児童の仕業であると決めつける日本人教師の間に入って、母語でその外国籍児童と話し、その子供の仕業ではないことを日本人教師に理解させたりした。そのブラジル人外国籍児童の心が傷つかなければいいと思った。

最後に、彼は多くの日本のよさを知らないで日本で働き、国へ帰ってしまうブラジル人たちに、一人でも多く、ボランティア日本語教室に行き、日本語を勉強してほしいと述べた。また、いつも笑顔で挨拶し、自分を励まして日本語を教えてくれたボランティア日本語教室の先生に感謝の言葉を述べた。

### (3) 日本語学校での体験：みんなで勉強すれば面白い

〔中国出身で横浜市在住の国立大学1年生〕唐紅海

唐紅海さんは、三重県の日本語学校ではじめて日本語を学び、三重大学に3年次で編入し卒業後、横浜国立大学大学院に進学した。唐さんは、よい日本語の授業のあり方について率直に話してくれた。i) 初級レベルの学習者のたどたどしい質問にも、学生は必死になって聞いているのだから、しっかり聞いて答えてほしい、ii) 学習者の間違いへの対処方法についても、共通の間違いを拾い出してしっかりと直してほしい、iii) 学習した文型や表現をいかに、どのように使えばよいのか、わかりやすく教えてほしい、iv) 学生が何を求めているかを常に考えた工夫した授業をしてほしい、v) ディスカッションの授業は、学んだ文型を使う場であり、ストレスがあったが仲間とともに表現力を高める授業だったので、今後も仲間とコミュニケーションをとりながら学ぶ活動を積極的に取り入れてほしい、vi) 長々と説明の時間をとって、教師主導で進める授業はやめてほしい、効率よく授業の時間を使う工夫をしてほしいと述べ、最後に、せっかく親の1年分の給料で2ヶ月分くらいしか過ごせない日本へ来て、苦学して留学生生活を送っているのだから、先生方にはもっと工夫したよい授業をしてほしい、と語った。

会場でとったアンケートでは、よい授業のあり方について具体的に留学生の話が聞けて

よかったという感想が多く、また、会場では彼の恩師も出席していて感動的な光景も見られた。

#### (4) 大学の集中コースでの体験：遠い記憶から今に生きていること

〔日本の国立大学大学院で学び、津市在住ペルー出身の主婦〕

石川・ポンセデレオン・サラ・イサベル

サラさんは、15年前に文部省の奨学金を得てペルーから北海道大学に留学し、大学の集中コースではじめて日本語を学んだ。現在、その大学で知り合ったご主人と二人のお子さんで津市に住んでいる。彼女が集中コースで学んでいたときは、in-putの量が余りにも多すぎて、日本語の授業以外に日本語を耳にしたくなかったと言う。「これはペンです。」「それはペンではありません。」と繰り返しリピートさせられる、それが良いか悪いか、当時はわからなかった。しかし、集中コースが終わってから日本国内へ一人旅に出たときに、自然に日本語を話す自分に驚いた。知らず知らずのうちに日本語が身に付いていたのだった。集中コースで共に学んだ留学生たちとは、お互いに変な日本語を聞き合うのが楽しく、時としてみんなで大笑いをした。

大学院時代は、研究室の中での日本語の勉強が辛く、使える日本語を身につけるための訓練の場だったように思う。中途半端な日本語を使い、何でも知りたがる私をチューターが疎ましく思ったのか、私が指導教官に伝えたい内容と反対の内容を伝えたりしていて、まだ日本語でうまく言えない自分が悔しかった。

現在、子育てで忙しいが、機会があれば就職したいと考えている。数年前に仕事をしたいと思ってハローワークへ行き、高校の家庭科のアシスタントに応募しようとした。すると、そこの事務員に「この仕事は外国人のための仕事ではない」と言われた。私の妹はアメリカで学位を取って、アメリカ人と戦って大学の教師になっているのに・・・。一般に外国人は社会で異質なものだけれど、アメリカ社会のように受け入れられている国もある。日本はちょっと「外国人」という枠があるような気がする。最後に、言葉と文化は同じ速さで受け入れることはむずかしいけれども、これからも日本語と日本文化の勉強を続けていきたいと意欲を述べた。

### 3-1-5. 講演「多言語・多文化社会を切り開く日本語教育—日本語教師にできること—」

お茶の水女子大学大学院教授 岡崎 眸

ここでは、岡崎眸氏より当日の資料としていただき、会場に配布したレジュメの項目を記載することで、講演内容を紹介することにしたい。



### 多言語・多文化社会を切り開く日本語教育—日本語教師にできること—

1. 社会の変化（民族間移動の激化する 21 世紀）
2. 多言語化・多文化化に伴う問題
  - 「単一言語・単一文化」社会の動揺—問題の噴出
  - 参入側の「外国人」が直面する問題
  - 受け入れ側の日本人が直面する問題
3. 日本語教師 「外国人」に一番近い存在
  - ① 日本人側に立って、外国人に「日本人への同化」を求める
    - 「郷に入れば郷に従え」：圧力鍋（多数派に少数派は吸収される）
  - ② 外国人の側に立って、日本人側に理解を求める
    - 「多様性の尊重」：サラダボール（多数派、少数派がそのまま力を発揮）
    - <日本人と外国人の間に誤解や排除のある、陰湿な社会>とするか
    - <日本人も外国人も、お互いに新しい発見のある、活力ある社会>とするか
4. (外国人) 代弁者としての日本語教師 外国人の立場を擁護する
  - 1) 外国人に日本語を学んでもらう 日本文化を学んでもらう
  - 2) 日本人、外国人とのコミュニケーションの方法を学んでもらう
5. 共生言語としての日本語
  - 日本人にとっての日本語：母語としての日本語
  - 外国人にとっての日本語：第二言語としての日本語（日本語話者と共生するための言語的手段としての日本語）共生言語としての日本語（性格：日本人も外国人も共にまなぶことが必要な言語）
6. 共生言語としての日本語教育と日本語教師
  - 1) 調整者 外国人と日本人がともに学ぶ場を調整して設定する
  - 2) 触媒者 外国人と日本人がともに学べるように学習の仕掛けをつくる
  - 3) 代弁者 日本人に対して外国人の立場を代弁し擁護する
7. 実践例
  - 1) 日本語教育実習（お茶の水女子大学大学院 1 年次の必修科目）成人クラス、子どもクラス
  - 2) NPO 法人こども LAMP 日本語を母語としない子どもの教科学習支援を目的
  - 3) 横浜市国際交流協会による母語を生かした教科学習支援モデル事業

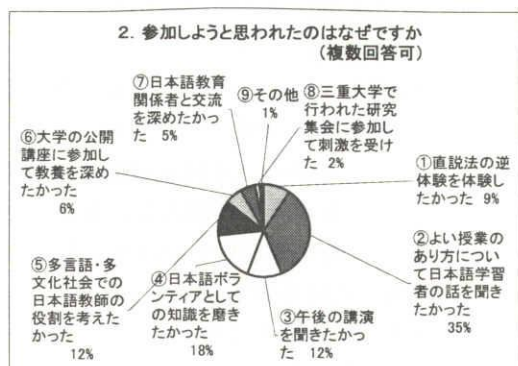
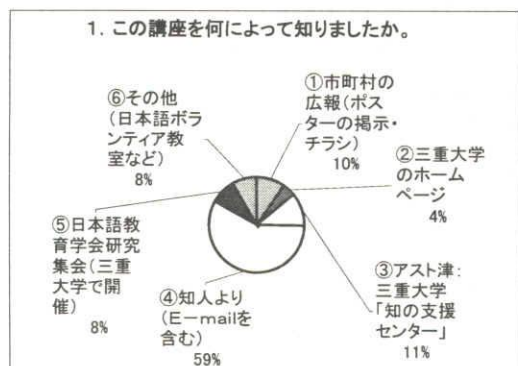
#### 4. アンケート結果について

この講座ではアンケートを準備し配布した。アンケートの回収率は 68.7%であった。主なアンケート結果について報告する。

まず、(1)「この講座の情報の入手先」であるが、E-mail を含む知人からの情報入手先

が59%と最も高かった。東海地域においてボランティア日本語教室のネットワーク網が充実してきていること、また、ボランティア日本語教室の代表者に案内を郵送したことにより、教室内の連絡網を使って情報が伝わったことなども考えられ、いずれにしてもボランティア日本語教室の情報網は徹底・充実していることがうかがえる。

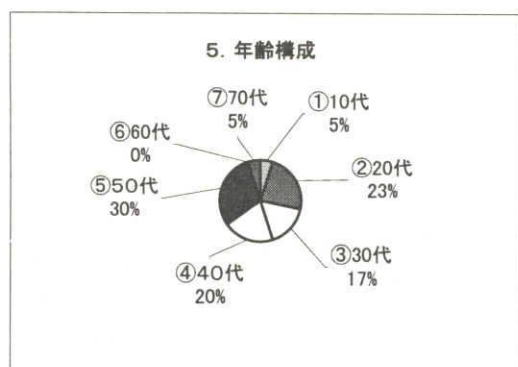
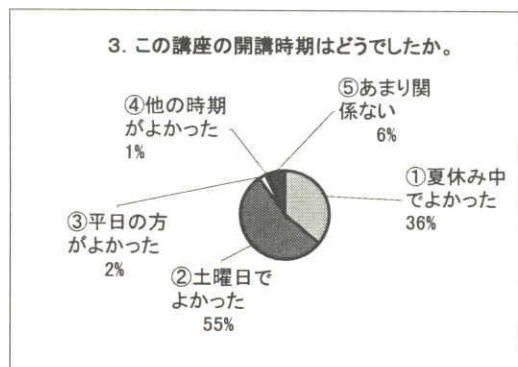
次に、(2)「参加理由」を尋ねると、「よい授業のあり方について日本語学習者の声を聞きたいこと」や、「日本語ボランティアとしての知識を磨きたいこと」を理由に挙げていて、ボランティア日本語教師の研修意欲の高さがうかがえる。



(3) この講座の開催時期については、夏休みで土曜日に行ったことは、アンケートの結果からも正解であったことがうかがえる。

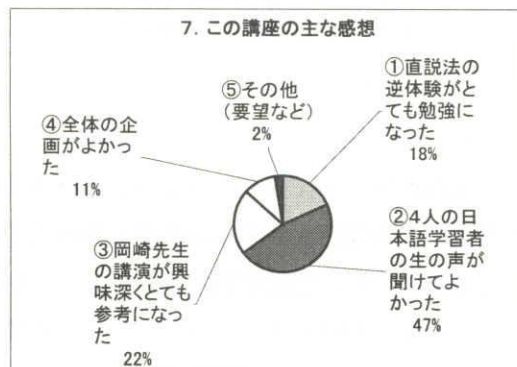
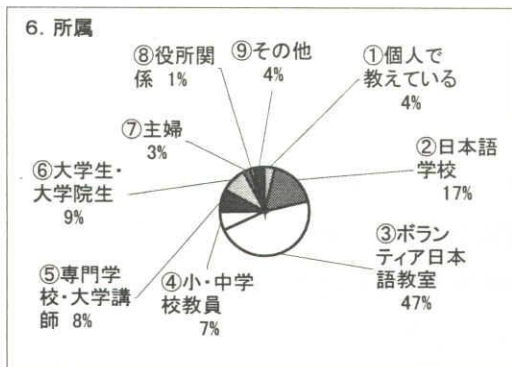
また、(4) 講座の企画内容について、①おもしろかった、②普通、③つまらなかった、という3項目でアンケートをとってみると、①93.4%、②6.6%、③0%で、企画としては非常に満足できるもので、有意義であったことが理解される。

(5) 参加した方々の年齢構成は、20代、30代、40代、50代が中心で、参加した方々の年齢構成はある年代に偏ることがなく、バランスが取れた参加が得られた。



(6) 実際に参加した方々の所属について、アンケートの結果から見てみると、ボランティア日本語教室 47%、日本語学校 17%、大学・大学院生 9%、専門学校・大学講師 8%、小中学校教師 7%が主な参加者であり、現在通信教育で日本語教育を学んでいる方の参加もあった。小中学校の教師や役所関係の方の参加もあり、非常に多くの方々に聞いていただけたことがわかった。

(7) この講座の感想について、記述形式で回答を求めたところ、回収したアンケートの 79.4%の方に回答をいただき、その内容をまとめると、「4人の日本語学習者の日本語の授業に対する生の声が聞けてよかった」47%、「岡崎先生の講演が興味深くとても参考になった」22%、「直接法の逆体験がとてもよい勉強になった」15%であった。「託児サービスがあるとよかった」等の要望もあった。



<感想>

- ・ 人にモノを教えることは、その人の人生に影響を与えてしまうことが多いので、簡単には考えてはいけなかったが、今回の講座でより認識させられた。
- ・ 直接法の逆体験、ひさしぶりに学生になり、脳も活性化された気がします。
- ・ 母国語を介さずに内容に触れ理解していかなければならない状況のストレスを身をもって知ることができ、目からうろこの思いです。
- ・ それぞれの理由で来日された4人の方の貴重な話を聞くことができたのがとても良かった。彼らの日本社会での様々な経験、日本教師に求められる要素、又彼らの思いを率直に語っていただけたと思う。
- ・ 中国の唐さんのご意見ごもっともです。「学生が何を求めているかも考えずに一方的に進めるのは授業ではない」私も同感です。
- ・ セルジオさんの学校の話は印象的だった。中学校で働いているが、言葉の壁による差別などが起こらないように気をつけなければならないし、支援がもっとできればよいと思った。
- ・ 日本語を学ぶきっかけとしての日本語ボランティアの先生による楽しい授業が、

- 日本語の勉強へのモチベーションとして大きい役割を果たしていると感じました。
- ・ 母語保障＝人権という考え方が無きに等しい地域で日本語を教えており、日々「母語支援」「入り込み授業」の重要性、必要性を切実に感じております。多勢に無勢でとすれば私の考え方はおかしいのかしらと思う中、岡崎先生の話をお救われる思いで拝聴しました。
  - ・ 岡崎先生のお話で共生社会の意味がよくわかりました。外国人だけではなく、日本人を入れた日本語教室はすぐにも実行したいと思いました。
  - ・ 同じ住民、地元の日本人として一日でも早く本当の意味での国際社会へ進めていかなければいけないと今日のお話で痛感しました。
  - ・ ボランティア教室の運営により刺激をいただきました。直接法の逆体験や生の留学生・社会人の方々のお声が聞けてよかったです。このようなユニークな企画を期待します。
  - ・ 予想以上に勉強になりました。このような質の高い内容を無料で提供していただきありがとうございました。

(8) 今後三重大学に期待する講座・シンポジウム内容については、「日本語の教え方などの実践講座」や「文法、教授法、社会言語学、音声、対照言語学、習得、評価法など、専門家による講演」、「日本語教育に関する研究会を開催してほしい」との要望があった。

最後に、(9)「三重大学留学生センターが地域の中で何か役割を担っていくとすれば、どんな役割を期待したいですか。」という質問には、回収したアンケートの22.1%の方にご回答いただいた。その内容を下記に紹介し、次項でその検討を行う。

9. 三重大学留学生センターが地域の中で何か役割を担っていくとすれば、どんな役割を期待したいですか。

- ・ 今回の講座のような機会を提供すること (他1)
- ・ 学習者を取り巻く困難を今回のように伝えてほしい
- ・ 外国籍の子供に対する支援 (他3)
- ・ 各ボランティア日本語教室との連携、ネットワーク化に協力する (他3)
- ・ 外国人を雇う企業人へ地域が抱える問題を発信してほしい
- ・ 各地域に国際交流の場を増やし、地域住民が参加しやすい場を提供すること
- ・ 地域・教育関係者などへの助言者になってほしい
- ・ 留学生センターの授業の公開
- ・ 地域の住民・在日外国人が多く参加するイベントへの参加
- ・ 定期的な日本語教育に関する勉強会を開いてほしい

## 5. ボランティア日本語教師が三重大学留学生センターに期待すること

今回企画した、「ボランティア日本語教師養成講座『実践：日本語教育』」は、ボランティア日本語教師や日本語教育関係者そして日本語教育に関心のある方々にとって、有意義な企画であったことが、動員数およびアンケート結果から示される。そのような意味で当初の企画の目的がほぼ達成されていたように思われる。今後も、①地域の日本語指導、地域の国際交流や異文化理解の一助となること、②地域住民を含め、小中学校の教師と日本語ボランティア教師との相互交流を行う場になるよう図ること、③大学の日本語教育専門家として地域に何ができるか、何が必要とされているかを念頭に置きつつ、④三重県において日本語指導のための実践的な研修の場としての役割を担えるよう図ること、これらを基本理念として今後もこのような講座を企画し、提供していきたい。

アンケート結果による今後企画してほしい講座・シンポジウムの内容であるが、日本語の教え方などの実践講座、日本語教育専門家の講演、日本語教育に関する研究会など希望する声が多かった。日本語の教え方については、多くのボランティア日本語教室で著名な専門家を招いて研究会を独自に開催しているところが多い。各ボランティア教室の要望を取り入れ、その取りまとめ的存在を大学側に期待しているのか、独自の視点からの講座の企画を期待しているのか、よく見定めたい。いずれにしても優先すべきことは地域のニーズに合った講座内容を企画していくことが重要である。

さらに、地域で期待される役割としては、アンケートの結果から、地域の日本語教育への貢献はもとより、地域の国際化、異文化理解のために、各ボランティア日本語教室との連携を図り、各地域に国際交流の場を提供し、地域住民が参加しやすい場を提供することであると推測される。即ち、あくまでも日本語学習者の声に耳を傾けつつ、ボランティア日本語教室をはじめとする日本語教育機関、行政、学校、企業を視野に入れた地域・教育関係者などへ、日本語教育、地域の国際化・異文化理解に関するとりまとめ、助言者になることが期待されていると思われる。

地域で期待される役割とは何か今回の企画で一番知りたかったことであるが、これらの期待される役割について、三重大学留学生センターがどのような役割を担えるかを留学生センター全体で議論し、そこで打ち出されたビジョンの下に一つ一つ実行に移していくことが望ましい。独立法人化以降の留学生センターには多くの期待があるが、地域貢献のあり方についても、センターの特色ある新たなステップとして一丸となって取り組むべき課題の一つであり、また、その稼働時期に来ている。

注

1. 三重大学が国際交流事業経費として助成するもので、①国際感覚をもった人材の育成、②国際的な人間関係の構築、③学内体制の国際化、④グローバルな課題での国際共同研究、⑤地域の国際交流への貢献を目的として行われている。
2. 今回の講座における参加者を地域別で見ると、津 32%、愛知県 12%、鈴鹿市 12%、伊勢 9%、松坂 4%、四日市 4%、大阪府 4%、桑名 3%、上野 2%、その他（三重県内他地域、他県）18%であった。

参考文献

- 岡崎眸（2004）「母語を生かした教科学習支援」の可能性—横浜市国際交流協会の取り組みから—  
『言語文化と日本語教育』第 27 号、pp4—17.
- 西口光一（1995）『日本語教師トレーニングマニュアル 4 日本語教授法を理解する本 歴史と理論編』バベル・プレス
- 日本語ボランティア講座編集委員会編『いま！日本語ボランティア東京編』凡人社
- 縫部義憲（1994）『日本語授業学入門—組み立て方、進め方、分析と診断—』瀝瀝社
- 縫部義憲（1998）『心と心がふれ合う日本語授業の創造』瀝瀝社
- 藤本久司（2003）「外国人就労者の日本語学習支援—ボランティア日本語教室の課題—」『三重大学留学生センター紀要』第 5 号、pp91—107.